『地域研究』第31号、2024年2月、171-180頁
沖縄大学地域研究所

Regional Studies. No.31 February 2024 pp.171-180
The Institute of Regional Studies, Okinawa University

ある小学校教師の回想
―桃原蓉子の話を聞く―

嘉　納　英　明*

Reminiscences of an Elementary School Teacher
―Interview with Yoko Toubaru―

KANO Hideaki

要　旨

元小学校教師の桃原蓉子は、戦前の皇民化教育を受け、戦後は民主主義を学び、教職に就いた。占領下の沖縄で立て続けに起こる米兵による犯罪や事件に怒り、復帰運動に傾倒する沖縄教職員会の中で運動を進める。日の丸・君が代に反対したが、主任手当の拠出運動については慎重であった。子どもの幸せと権利保障を願う沖縄の教師の一人であった。

キーワード：沖縄教職員会、復帰運動、日の丸・君が代、主任手当

桃原蓉子先生と出会ったのは、平成元年度のことである。私は、同年４月に、具志川市立兼原小学校教諭に採用された。同校は、800名を超える大規模校であった。大先輩の桃原先生は、主に中学年の担任をしていた。浅黒い顔に小柄な身体でシャキシャキと裸足（からびさー）で歩き回る教師であった。話をする時は、まっすぐに相手の顔を見るので、ちょっと緊張感を覚えた者もいたかもしれない。ある時、職員室の桃原先生の机の下に、木箱に入れたアカマタ[(1)]を見つけた。どこかで捕まえて、飼っているようである。アカマタに気づいた若い女教師は悲鳴を上げた。ヤモリでも何でも素手で捕まえるツワモノである。一方で、博学で、歩く図書館（移動図書館）のような方であった。熱心に本を読み、毎日、新聞には目を通す教師であった。

2002（平成14）年に学校週５日制が完全実施されるまで、土曜日の午前中は授業であった。

* 名桜大学国際学部教授・沖縄大学地域研究所特別研究員　kano@meio-u.ac.jp

授業を終えて職員室に向かうと、「お昼を奢るから、宜野湾まで送れ」とか言われて、アッシー[(2)]としてハンドルを握った。教職員組合の集まりなのか、何の集まりかはよくわからなかったが、土曜日の午後は、忙しそうに市内外の用事に出かけた。桃原先生の口癖は、「怖いものは、何もない！」ということだった。実際、自宅の前の道路がなかなか舗装されないので、繰り返し市役所に苦情を入れたりしたが、なしのつぶてが続いたそうである。それで、議場の前で市長を捕まえて、直談判をするような教師であった。職員室では朗々と自説を語り、筋金入りの組合員を感じさせた。

平成元年度は、小学校の初任者研修制度の完全実施の年であった。この制度は、１年間、先輩教師が初任者に対して、学級づくりや教材研究の方法等を指導するというものである。私は、校内で先輩教師の示範授業を参観する機会を得ていた。その中でも桃原先生の国語の授業については、いまでも強烈な印象を持っている。事前に頂いた指導案（略案）には、授業者の説明や発問、子どもの反応・声が記されていた。授業を参観すると、桃原先生の質問や発問に答える子どもの発言が、略案の通り、そのままそっくり、実際に出てきた。略案を片手に授業の感想を述べると、「私が、こんなことを言ったら、あの子は、こんな感じで答えるでしょうに」と訥々と説明した。子ども観察の眼の確かさに驚いた。

桃原先生は、現在のうるま市出身である。地元の小中高校を卒業後、しばらく基地内で働き、その後、琉球大学へ入学した。1959（昭和34）年に、金武湾小中学校（現在の具志川小学校）を振り出しに、川崎小学校、あげな小学校、中の町小学校、コザ小学校、兼原小学校、天願小学校で務めた。地元のうるま市や沖縄市で教鞭をとっていた教師である。1995（平成７）年３月、天願小学校で定年を迎えた。教師生活は37年である。その桃原先生も、1935（昭和10）年生まれの、今年88歳の後期高齢者である。私は兼原小学校から他校へ異動して、桃原先生とは、なかなかお会いする機会がなかった。今回、久方ぶりに、桃原節をお聞きしたいと思い、2023年８月22日、うるま市のみどり町のマクドナルドでお会いした。店内の席に着くやいなや、Sサイズのコーラの注文を受けた。商品を受け取り、桃原先生の話に耳を傾けた。教師であった父親の話を始めた。

桃原　　私の父親は、戦前、小学校の教師だったんだけれども、治安維持法で２年間、停職処分にあった。というのは、その頃の嘉手納では、黒糖を入れるためにタルガー（樽皮）[(3)]があって、その樽を作る人たちの労働環境が悪くて、改善のために組合結成の話があったわけ。自分たちの働く環境を良くしようと組合結成の動きがあったわけね。父親は、その組合結成の手助けをしたからといって、停職処分にあったわけさ。父親は教師だったんだけど、その樽職人の生活をどうにかしたいと考えていたわけ。青年教師たちの運動さ。

桃原先生の父親の話を聞くのは初めてである。嘉手納のタルガーとかかわっての治安維持

法による検挙事案は、資料的には確認できなかったが、桃原先生の気骨のある性格は、父親譲りであるのかと感じながら、さらに話を聞いた。戦時下からの話である。

桃原　　私は昭和10年生まれ。３年生の頃までは学校に行っていたけど、勉強らしいことはあんまり覚えていない。４年生の時には沖縄戦で勉強していない。米軍は、４月１日には沖縄本島に上陸したでしょう。沖縄戦の始まりだからさ。家族で避難したさ。捕虜になって、戦後は、地元の小学校、中学校を卒業して、前原高校に通った。高校を卒業して、少し、基地内で働いたんだけど。６月から翌年の２月くらいまで、軍で。大学の受験もあったので、２月まで。大学に行くためにはお金が必要さ。貯めるために基地で働いた。でも、屈辱的なこともあったね。誓約書を書かされた。その内容はね､｢私はアメリカ軍人にモノをねだったりしません｣というようなもの。またある時、基地内の従業員、全員、集められて、下着以外、脱いで身体検査。ブラジャーの中に売り上げのアメリカドル[(4)]を隠し持っている者がいないか、それのチェックさ。あの頃のドルは相当な価値があったから。ウチナーンチュの中には、お金を隠し持っていた者もいたらしいから。

基地で働いた後、同級生よりも１年遅れて、首里にあった琉球大学に入学した。1955年の春のこと。大学を卒業して、最初の学校は、いまの具志川小学校。当時は、金武湾小中学校といって､小学校と中学校の併置校。1959年に採用された。そしたら、その年の６月30日、その日は、何が起こったか、知っている？　そう、宮森小学校にジェット機が墜落した日さ[(5)]。その日、職員が話しているのを聞いてね。チムワサワサーして。あの頃は、脱脂粉乳のミルク給食[(6)]の時代でしょう。そのミルク給食の時に、嘉手納所属のジェット機が墜落炎上したんだよ。たくさんの子どもたちが亡くなって、ケガした子もたくさん。北谷にあるアメリカの軍病院に運び込まれていたりしてさ。その頃の教師は、車なんか持っていなかったら、宮森小学校にはなかなか行けなかったよ。だから、実際、どうなっていたかはわからないさ。人づてにしか聞けないさ。実際には見てないから。

その宮森のことで､ワジワジーしたことがある。当時の石川市の市長が､被害にあった子どもたちを軍病院に搬送したことで米軍にお礼を言う、みたいなことを言ったので、民衆が怒ってね。こっちは被害になっているもんだから、感謝とか、お礼とか言うのはおかしい、ということ。また、子どもの親は、亡くなった子どもを合同火葬にするというのにも､「２度も、子どもを焼き殺すのか！」ということで、問題になって。憤慨して、それは取りやめになったという話も聞いた。宮森だけではないよ。川崎にもジェット機が墜落して[(7)]、亡くなった人もいるから。川崎には住宅に落ちて、被害が出たね。

教師生活１年目の夏、桃原先生にとって忘れがたい出来事が、宮森小学校ジェット機墜落事件であった。整備不良の戦闘機が街中の小学校に墜落して、多大な犠牲を出したこの事件は、戦後沖縄史における重大事件のひとつである。やがて、桃原先生の話は、1960年代の粗末な教室の状況と復帰運動の話に移っていく。

桃原　当時の教室は、非常にみすぼらしくて。ひとつの教室を間仕切りして２つの教室にしていくわけさ。そこに、子どもたちがぎゅうぎゅう詰めで授業。子どもはいっぱいいるのに、教室が全然足りない。本当に足りない。教材も教具もないわけ。だから、内地からの援助というか、日本政府の援助で、購入してもらって。日政援助っていうもの。でも、色々、やっぱり足りなかった。だから、教職員会の屋良朝苗[(8)]さんが、喜屋武真栄[(9)]さんと一緒に全国を回って、募金。全国行脚。それで、理科の実験器具がそろったりして。図書もずいぶんと増えるようになった。でも、その頃は、学校の図書の司書は配置されていないから、担任が、空き時間や放課後は、図書室の世話をするみたいな感じで。私は、まだ、若かったから、図書室の担当になったりして。それは、とても忙しかった。図書の基本台帳は手書きだし、図書カードも作ったりして。いまは、バーコードなんかでコンピュータでしょう。あの頃は、全て手書きさ。時間がずいぶん、かかった。

図書の分類法とか、著作権のこととか、色々、勉強したけどね。そんな知識もないのに、講習とか受けたりして、勉強さ。難儀な仕事だったけど、国語が好きだったから、何となく図書室の係も担当しないといけない、みたいな感じで。また、若かったし。

嘉納　私がコザの安慶田小学校に入学したのは、1970年だけど、学校の教室は間仕切りみたいなもので仕切られていました。学芸会の時には、それを外して、２つ、３つの教室をつなげましたね。ところで、1960年代に入ると、ベトナム戦争の反対運動や復帰運動は、大きな盛り上がりをみせたんじゃないですか。

桃原　具志川小学校の次の学校は、川崎小学校。川崎に務めている時は、ベトナム戦争が激化して、反戦運動が盛り上がって。事件事故も繰り返し起こって。米軍車両による事故や婦女子に対する暴行事件もあったから。軍用機の爆音も凄くてね。５分に１回は、爆音で授業は中断して、授業にならない。大きな声を出して授業をして。私は、元々、綺麗な声だったんだけどね（笑）、いまは、こんなになっているさ（笑）。川崎の時に、大きな声を出し過ぎて、こんな声になっているさ。川崎小学校の上空は、戦闘機の飛ぶルートになっていて、うるさかった。軍雇用員の首切り反対の運動もあって。川崎小学校の正門に面して、米軍施設があるわけ。その正門で、全軍労を支えるために、スクラムを組んで、米軍施設に対して反対運動。年休をとってね。

天願小学校の時には、こんなこともあったよ。組合は自衛隊反対だから、自衛隊の子どもが学校に入学するのも反対。天願小学校の近くに自衛隊の宿舎みたいなものもあって、そこは、校区内なの。私は、子どもの教育を受ける権利は大切だと考えていたので、組合というか分会というか、その考えには賛同できなかったな。

60年代の後半になると、復帰運動は盛り上がったね。那覇の与儀公園によく行った。与儀公園は、いろんな集会の拠点みたいな感じ。旗をたなびかすために長い竹は必要でしょう。長い竹なので、バスに積むことはできないから、先にバスに乗った者が窓から手を出して、旗を受け取り、与儀公園まで支えて持っていたよ。

桃原先生は、立て続けに起こる米軍による犯罪や事件に怒り、復帰運動に傾倒する教職員会の中で共に運動を進めていく。当時の教師の人事異動は、7年勤務が基本であったらしい。復帰の年、桃原先生は、３校目のあげな小学校勤務であった。

嘉納　復帰の時に、私は小学校３年生だった。担任からは、復帰記念メダルをもらったけど、その後、担任から「メダルは返しなさい」と言われて、クラスの友達は担任に返した。また、ニコニコマークの入った筆箱や下敷きなどをもらって、復帰って、大きなお祝い事なんだなと感じていたけど、桃原先生は、あげな小学校ではどのように復帰を感じていたんですか。

桃原　復帰記念のメダルとか、筆箱とかの記憶は、全くないなあ。そんなの、子どもに配った覚えはないな。むしろ、復帰を境にして、日の丸・君が代の問題だね。復帰前は、日の丸の小旗を振るように学校では指導したし、日の丸を売るようなこともしたんだから。でも、そのあと、米軍からにらまれて。復帰運動は、するなということでしょう。米軍に抑え込められていたわけだから。復帰したら、天皇制につながるから、今度は、日の丸は上げないという形になった。ただ、親には理解されにくいこともあって、自宅の門に日の丸を掲げるところもあったね。復帰前は、西銘順治の「イモはだし論」(10) もあってね。沖縄の保守の中には、いま、復帰したら、沖縄は貧しくて、芋を食べ、裸足になるようってね。復帰前は、本当にいろんな考えがあって。新川明の反復帰論もあったし。混沌としていて、民衆の中にも考えもいろいろあったし。あーでもない、こーでもない、と。でも、復帰したら、天皇制の考えも強くなってきたんじゃないの。だから、日の丸と君が代の強制があって、学校現場は混乱。政治家の中にも、右とか左とかの色分けがはっきりしてきたし。

嘉納　卒業式や入学式前になると、職員会議は、日の丸掲揚と君が代斉唱のことで、もめたね。管理職と。私は初任者だったから、ある先輩に、「あんたは、初任者だから管

理職や教育委員会ににらまれないように、起立した方がいいよ」なんて、忠告もされましたよ。ある日の職員会議の時、30代の女性教師が、校長に対して、「私たち後輩は、校長先生らが若い時の復帰運動から学んで教師になりました。その教えの通りに運動をしてきたんですが、それが間違っているとでも言うのですか」と言って、校長は、困っていましたね。

桃原先生は、日の丸、君が代のことで印象に残っていることは、何ですか。

桃原　1995（平成７）年３月に天願小学校を退職して、翌年の卒業式を見に行ったわけさ。そしたら、日の丸は掲揚されているし、君が代斉唱の時は、私と、ある男の先生だけが起立せず着席したまま。その先生は現職。現職の教師で一人だけ着席。他は、みんな起立。私は、退職していたから一般席で座ったまま。君が代斉唱の時のあの風景は忘れられないね。

嘉納　復帰後、主任制[11]闘争もあったでしょう。その辺の話も聞かせて下さい。

桃原　主任制ね。ずいぶんと揉めた。組合の方針としては、主任手当は受け取らないということ。主任手当を拠出して、沖縄県の教育委員会に返すということを方針としていたんだが、私は、その方針には賛成しなかった。主任手当を拠出しなかった。主任手当を別な方法で活用するのなら分かるが、ただ、県に返すという考えに賛同できなかったね。高教組は、やんばるの自然保護で活用するということだったんで、そんな活用方法が沖教組にあったら賛成したけどね。

ある時、分会長に、「主任手当の拠出については、組合で組織決定したんだから、従って欲しい。他の人は出しているのに、桃原先生だけ、出さないのは問題でしょう」と言われて、つるし上げにあった。だけど、私は、折れなかった。だって、その主任手当の拠出っておかしいでしょう。私は、手当を有効に使うならわかるので、別に手当分だけ貯めていて、その有効な方法が決まったら、拠出するつもりでいたね。そんなことを分会で話した。その分会長も、その後しばらくしたら、校長になってね。人って変わるね。校長になったら、担任が授業をきちんと授業をしているのか、週案のチェックをするようになったらしくてね。恥ずかしいね。管理職になったら人って変わるよ。ところで、その主任手当、その後、どうなったの？

嘉納　主任手当については、以前、まとまった論文を書いていて。例えば、那覇地区の教職員組合は、平和の絵本やフィルムなどを購入して、学校現場で活用を図るなどをしていたらしいですね。

桃原　日の丸・君が代といい、主任制といい、国からの弾圧に対してどれだけ職員が抵抗できるかだな。いまの時代は、なかなか、難しいのじゃないの。他の人の目が気になるし、同調するというか、横並びの考えが強くなっているから。これって日本人の体質じゃないの？　教員も日本人だから、同じ体質で、大きな圧力が来たら抵抗しないで、体を張らないで、そのまま呑まれるんじゃないの。

嘉納　教職員会でリーダーシップを発揮した屋良朝苗さんについては、桃原先生はどのような印象を持っているのでしょうか。

桃原　屋良さんは、人格者という評価があるね。先生の批判をする人は、ほとんどいないね。いや、少しはいたね。組合の中にも、屋良さんに対してごく一部だけれども、陰口を言う者はいたな。でもやっぱり、屋良さんは米軍との対立ではその力を発揮したと思うのだけれども、復帰後のCTS問題[(12)]については大変だったらしいね。CTS問題は、巨大資本との闘いであって、これまでの米軍との闘い方とは違っているでしょう。闘争の仕方というか、闘い方がわからなかったと思うよ。本土では国鉄の闘争だとか、総評のリーダーシップというか、労働運動の旗振り役がしっかり役割をこなしていたと思うのだけれども。沖縄では、本当の意味でリーダーシップを取れる人がいなかったのではないかなとも感じるね。私は、CTSの頃、子育て真っただ中だったので、この問題にはかかわっていないよ。

ちょっと話は違うけど、復帰前は教職員会で、復帰後は教職員組合さ。組織的は違ってきたかな。教職員会時代は、管理職も入っていて、教職員のまとまりを感じていたけれど、復帰後、組合に移行すると管理職は入らない。復帰したから、本土からいろんな人が来て、組合にも入ってきたわけさ。だから、組合活動や方針も、そうした本土から来た人たちの影響を受けて、それで、組合の路線問題とか、いろいろ揉めることにもなったと思うよ。

嘉納　復帰前と復帰後の教育では、何が大きく変わったのでしょうか。

桃原　復帰前と復帰後の教育がどんなふうに変わったのかの前に、戦前と戦後の教育の変わりようからだね。戦前は、やっぱり、公を大切にしていたし、戦後は、私、個人だな。戦前の公は、天皇制と結びついて、学校では皇民化教育でしょう。公が私、個人よりも上にあったわけさ。戦前は、個というものがないさ。私たちが受けた戦前の教育は、「すべてお国のため」、「兵隊さんのおかげ」だったわけ。ご飯食べる時も、「兵隊さんのおかげで頂くことができる」という考え。男と女の違いもあったし。戦前は、男が赤い服を着るのは考えられなかったんだから。帽子も、男は前につばがあって、

女の帽子は、丸くてつばのあるもの。いま、体育の帽子は、男子も女子も同じものでしょう。発表会なんかのダンスも、女子がやるものと決まっていた。戦争が終わって、学校でダンスをすることになって、男子にさせようとしたら反対されて。「ダンスは、女がやるもの」と言ってきかない。男子には、ガーって言って、させたけど。戦前は、お国ためにするものだったが、戦争が終わると、個人を大切にするようになったね。民主主義と結びついて。

高校生の時は、社会科の授業で民主主義というものを初めて勉強した。ある教師は分厚い教科書を持ってね。でも、戦前、軍国主義教育を教えていただろう教師が、戦後は、「我こそは民主主義の第一人者」と言わんばかりに大手を振ってやっていたね。手のひらを返すように。文学者の中にも結構そんな人がいたな。戦争に負けて、世の中が変わると、人も世の流れに合わせて変わるね。

復帰前について話をすると、何やかんやあったけど、教職員会を中心に、一応、教師集団のまとまりはあったと思うよ。沖縄の復帰が目的だったからね。その目的に向かって、とりあえずはまとまっていたんじゃないかな。でも、復帰したら、目的は達成して、いろんな考えが出てきて。国もいろいろ強行してきたでしょうから。

嘉納　退職してずいぶんと経っていますが、いまの教育に大切なこと、教師にとって大切なことは何でしょうか。いまの教師やこれから教師を目指す若い者に対してメッセージ的にも宜しいので。

桃原　教師は、子どもの幸せを第一に考える必要があるね。それが一番大切だよ。子どもの幸せのために何ができるか、どんなことができるか、だね。いま、沖縄の子どもの貧困問題が深刻でしょう。教師たる者はね、一番これを頭において、子どもの貧困問題を解決するために、何をどのようにすればよいのかを考える必要があるよ。

私が教えた子どもの中にね、親がいなくて祖母が世話しているわけ。一年中、同じ服。そんなことって考えられる？　また沖縄では、いま、高校進学もかなり高くなっているけど、60％とか、70％とかもあったわけさ。高校も少なくて、高校浪人も多かった。高校に行けなかった人は、本土に就職したりして、「金の卵」とか言われていたけど。方言しか話せない子が、内地で生活できる？　教え子にも内地に行っていたんだけど、言葉の問題は大きかったね。でも、内地で頑張って一人前になって帰ってきたさ。「お母さんもおばあちゃんも、僕が支えないと生活できないから」と言ってね。ある子は、電車の乗り方も知らない、地理もちゃんとわからない。そんな子が内地で就職。集団就職でも大きな会社だったらいいさ、この子の場合、米屋とか牛乳配達とか、ほんとに小さな店だったからね。心細かったかと思うよ。地理感覚もわからないのに、牛乳なんか配達できないよ。高校に行けなくてちゃんとした仕事がない。それであるお母

さんが、涙を流さんばかりに「先生、この子のために仕事ありませんか？」というもんだから、返答のしようがなくて、苦しくてね。だから、教師は、子どもの幸せのために何ができるか考えていくことが大切だと思う。

戦前の皇民化教育を受け、戦後は民主主義を学んだ桃原先生は、教師として沖縄の戦後史と重ね合わせながら教職生活を送ってきた。米軍や米軍基地と対峙してきた教師であり、常に脳裏にあるのは、子どもの幸せであり、子どもの教育の権利をどのように実現するのか、ということであったのではないか。また、確固たる持論を内に秘め、自身が納得しないと行動に移さないという信念のある教師でもあった。かつて、主任制についてまとめたことがあったが（注11）、組合の方針である主任手当の拠出も100％ではなかったその理由の一端も理解することができた。

注

(1) 平地から山地に生息する蛇である。毒は無い。鳥類、爬虫類、カエル、魚類などを食べる。

(2) 女性が移動する際に自家用車で送り迎えをする、女性にとっては都合の良い男性を指していう俗称である。バブル期に出現したといわれる。

(3) 戦前の産業にはタルガー（樽皮）製造があった。樽皮とは黒糖を本土に出荷するときに詰める容器のことである。那覇、泡瀬、与那原、宮古、糸満、本部と並んで嘉手納でも製造されていた。

(4) 当時、沖縄で流通していたのはアメリカ軍発行のB円である。 B円は、1945年から1958年９月まで米軍占領下の沖縄等で通貨として流通し、その後、ドルへと通貨が切り替えられた。米兵は基地内ではドルを使用した。

(5) 1959年６月30日に米軍統治下の沖縄・石川市（現：うるま市）で起こった空軍機による航空事故。ミルク給食の時間に発生。児童を含む住民17名の死者（のちに１人死亡）、重軽傷多数の被害であった。

(6) 戦後しばらく牛乳の代替として学校給食に提供された。

(7) 1961（昭和36）年、旧具志川村川崎（現うるま市川崎）に米軍機が墜落し、死者２人と重軽傷者７人を出した事故（詳細は、嘉納英明「基地被害と子どもの人権」うるま市具志川市史編さん委員会編『具志川市史』第６巻、教育編、所収）。

(8) 屋良朝苗（1902年～1997年）、読谷村出身。沖縄教職員会の会長、公選主席、沖縄県知事を務めた。

(9) 喜屋武真栄（1912年～1997年）、北中城村出身。屋良朝苗と共に「祖国復帰」運動の先頭に立った。復帰後は参議院議員を務め、沖縄の革新統一運動の象徴的存在だった。

(10) イモハダシ論は、1968（昭和43）年の主席公選で、保守陣営・西銘順治候補の持論。米軍基地撤去、即時無条件返還を掲げた革新統一候補の屋良朝苗が勝利すると、イモを食

い、はだしの生活に戻ると強調した内容であった。

(11) 学校の運営や教育活動が円滑かつ効果的に展開されるために導入された校内組織運営の制度のことである。校長、教頭のもとに、教務主任、教科主任、学年主任、体育主任等がある。主任は、一日につき200円の手当が支給される（月額4,000円程度）。沖縄県教職員組合は、学校経営の管理統制につながるものとして反対し、給与の一部として支給された主任手当額を拠出する運動を進めた（詳細は、嘉納英明「復帰後沖縄における学校管理規則の改正と主任制導入問題―那覇市における主任制導入問題に焦点をあてて―」琉球大学教育学部移動大学研究会／水野益継監修『Recurrent Education－移動大学の活眼と郷学講義録23稿－』2002年、所収）。

(12) アメリカの石油会社ガルフ社の石油備蓄基地（CTS:Central Terminal Station）建設をめぐる問題。海域の埋め立てや原油の流出などの公害問題が深刻化し、CTS建設反対運動が激化した。